

## 「アルベルト・シュバイツァー病院報告書」

1977年12月

地域文化コース4年  
土井敏邦

—アルベルト・シュバイツァー病院は今—

赤道よりわずかに南に下るランバレネ地方（カボン共和国は、日本の冬に当る1月前後が最も暑さの厳しい時期です。私がランバレネのアルベルト・シュバイツァー病院を訪れたのは12月7日、半袖シャツ一枚と半ズボン姿でも日中は日陰でさえ汗がにじみ出てくる程蒸暑い。対岸からエンジン付カヌーでオゴウェ川を渡り、病院のある岸にたどり着くと、写真で見覚えたまさにその光景が眼前に現れた。トタン屋根の病棟の列、ヤシの林、そのむこうには林の緑にふちどられたオゴウェ川。病院見学のため日本から来た旨を伝えと、すぐにこの病院で働く若い看護婦、医学生らのための宿舎の一部屋が私のために手配された。洗面所とベット、小さな机と椅子、それに戸棚だけの日本流に言えば四畳半程の狭い、質素な部屋ですが、二面の壁は網張りで風通しのいい、清潔な部屋です。その夜食堂ではじめて彼ら、この病院で働くヨーロッパ人（スイスが大半を占めているようです）たちと対面したのですが、フランス語がこの病院内の公用語で思うように意が通じないのは残念なことです。それでも、彼らの家庭的な明るい雰囲気心がなごみました。食堂の正面にはシュバイツァー博士の大きな写真が、左右の壁には博士がその音楽を愛したバッハの肖像画、博士の生家の絵画、オゴウェ川の写真が飾られています。

生前の博士の部屋はそのままの姿で保存されていました。部屋に入るとまず、真白なシーツにおおわれたベットが目につきます。この上であの「アフリカの聖者」は静かに息を引き取ったのだと案内してくれた婦人が説明してくれました。1965年9月4日のことです。ベットの横の机には、博士が愛用した筆記用具やメガネ、そしてランプが当時のままに置かれていました。隣の部屋には数多い博士の写真やオランダから贈られた賞状が飾られ、書棚には博士

の蔵書や博士に関する各国の著書が並びます。日本白水社出版「シュバイツァー著作集」全刊もこの書棚の一隅を飾っています。奥には、博士の最初の赴任の時、フランスバッハ協会から贈られたピアノが今では誰の指にも触れられることなく眠っていました。

シュバイツァー時代の病棟も、ほとんどそのまま残っています。実験室として使用されていた部屋は現在資料室の一部となっているようなことはありませんが。建ち並ぶ病棟のひとつに「日本病棟」という日本語を見つけて驚いた。日本からの寄附金によって建てられた病棟である。

このシュバイツァー病院と日本との関りあいはいはこれだけではありませんでした。癩病患者たちのための病棟（通例癩病村と呼ばれるようです）はヤシの林を隔てて、他の病棟の西方に並んでいます。はじめて見る癩病患者たちとその「村」は、私には異様な雰囲気だった。この「村」で働かれた日本の高橋医師の名前は氏のランバレネの病院に関する著書によって私の記憶に残っていた。このランバレネに着く数日前、ガボン在住のある日本人の方から、（高橋氏が最近亡くなられた）という情報を得ていました。軽率な私は、それが事実なのか確かめることもせず、高橋医師を知っているという、ある老人の患者にそのことをたどたどしいフランス語で伝えた。（もし、それが誤報であるなら、高橋氏に対して大変失礼なことをしてしまったこととなります。）

驚いたその老人は、大声で他の患者たちに私の言葉を伝えた。数人の患者がその報を聞いてかけつけてきた。足の患部の包帯が痛々しい老女が、私に本当かと問い正す。うなづく私を見た老女は頭を振りながら「ノン！ノン！」と何度もつぶやき、地面に座りこんでしまいました。老女の目に涙がうるむのを見た時、私は自分の投げかけた言葉の波紋の大きさととまどってしまったのです。氏がこの癩病村で働

いておられたのはもう随分以前のことだと記憶していますが、今なお、氏の名と人柄はこの「村」の患者たちの中に鮮明に残っていたのです。著書を通して以外氏を知らない私も「高橋医師の死」という言葉に対する患者たちの思いがけない反応に接して、氏の人柄とこの癩病村における仕事ぶりを想像できます。そしてこれ程までに患者たちに親しまれていた氏を同じ日本人として私は誇りに思います。地面に座り込んで涙を流している老女の姿を見て、私の胸に熱いものがこみあげてきました。

博士の墓標は、博士の妻、博士の事業を助け、この地で亡くなった医師や看護婦たちの墓標と伴にオゴウェ川を見渡す坂道の傍に立っています。案内してくれた婦人に、どれが博士の墓標なのかと尋ねなければならぬ程他と見分けがつきにくい質素なもの



(シュバイツァーの墓)

でした。博士の遺志によるものでしょうが、本当にこれが、その名を世界に知られた故人の墓なのかと我目を疑った程です。

シュバイツァーを喧伝家と評し、ランバレネ事業を売名行為と非難する声もあると聞きます。それについて生前のシュバイツァーを知るこの病院内の最年長者、マリアさん(Maria. Y. Lagedjk)に尋ねてみた。(博士の「水と原始林のはざまで」という著書に感動して15才少女マリアは、その後、助産婦の資格取得後手紙で博士にランバレネで働きたい旨を伝え、彼女の希望が叶えられてこのランバレネに赴任したのは1938年のことです。)マリアさんは強い口調で「とんでもない話です。もし博士が喧伝家だったならば、世界の人々を驚かすような豪華な病院を建てたことでしょう。」シュバイツァーが、病院の設備の近代化に積極的でなかった理由について「博士は病院の近代化をこの地方の発展速度に歩調を合わせようとしたためであり、現地人生活状態から、浮き上がった病院の存在を好まなかったからです。※1」と彼女は説明してくれました。

私自身はこう思うのです。シュバイツァーは、つ

まり、高価な近代的設備を必要とする少数特定の病気の治癒よりも、むしろこの熱帯地方に広汎に拡がる病気の、安価な薬品でも可能な治癒を、できるだけ多くの患者に施すことに主眼を置いたためではないだろうか。シュバイツァーのランバレネにおける治療に関する記述※2からして、それが全般的をはずれた推測ではないと思うのです。

私はシュバイツァーを喧伝家と評し、ランバレネ事業を売名行為と酷評する輩に断じて与するものではありません。だがと云って、またシュバイツァーの「完璧な人格」と彼のランバレネ事業に対する「純粋な人類愛としての動機」に執着するつもりありません。万が一、一部の者が評するように、シュバイツァーの動機が不純なものであったとしましう。そうだとしても1913年以来、シュバイツァー自身の言葉を借りれば「ほっておけば絶望しながら運命に屈服せねばならぬ人間を一年間に数百人も苦しみと死の暴力から救い出してきた」事実、そして今なおガボン全域から患者たちが救いを求めて、はるばる集まってくるこの病院の果している役割の大きさを一体誰に否定できません。

病院経営資金の約63%を占める世界中からの好意的な寄附金は、「シュバイツァー精神」※3と「シュバイツァーのランバレネ事業」に対する世界の人々の共鳴であり、シュバイツァーのともした灯を絶やさないとする願いの表明ではないでしょうか。また、その寄附金が、この病院の医師や看護婦、その他の技術者たちが、'idealistic purpose'のために働くことのできる環境を支えているとも言えましょう。

私立医大のエスカレートする寄附金問題や、医師のモラルの問題がクローズアップされている今日の日本にアルベルト・シュバイツァーの精神とその病院の今日の姿の一片を伝えることは、無意味ではないと信じてペンを取りました。

医学的技術水準においても、また経済的水準においても世界の最高レベルに達していると言われる今日の日本から第二、第三の「高橋医師」が生まれ、世界の医療に恵まれない国々に第二、第三の「シュバイツァー病院」が日本の援助の元に生み出されることを願うのは私独りでしょうか。 —完—

※1 シュバイツァー自身の言葉にも次のような一文がみられる。

「現存する掟と風習を向上させるべきであって、やむをえぬ場合のほかは現行するものに変更を加える

べきではない) (「水と原始林のはざま」 浅井真男 訳)

※2 シュバイツァーのランパレネにおける治療に関する記述の一片として次のような一文があります。

「わたし自身の経験とすべての植民地の医師たちの経験からわたしは答える。向うでは、ごくわずかな資金しか持たない、たった一人の医師でも多くの人間にとって多くの意味を持つのだと彼の生計のために寄附された資金の百倍にもなるのである。マラリヤのためのキニーネと砒素、潰瘍に伴う種々の余病のためのノヴェルゼンベンゾール、赤痢のためのエメチン、ごく必要な手術のための材料と知識、これだけのものさえ備えていれば医者にはほっておけば絶望しながら運命に屈服しなければならぬ人間を、一年間に数百人も苦しみと死の暴力から救い出せるのである。」 (同上)

※3 「シュバイツァー精神」の一片を伝える次のような二文がある。

「あらゆる国々の白人は遠い国々を発見して以来有色人種に何をして来たか？イエスの名に身を飾ったヨーロッパ人が行ったところでは、あまたの民族が死滅し、他の民族は死滅しつつあるか、たえず減少しつつあるという事実だけでも一体何を語っているだろう！あの諸民族が数世紀のあいだにヨーロッパの諸民族から受けた不正と残虐を誰が述べうるか？われわれが彼らにもたらした火酒と、いまわしい病気が、彼らのあいだに作り出した惨害を測る勇気のある者がいるだろうか！

われわれと、われわれの文化は大きな罪の重荷を負っている。向うの人間たちに善事をするかしないかは、全くわれわれの自由にまかされてはいない。われわれはそれをせねばならぬのである。われわれが彼らになす善事は慈善ではなくて罪のあがないである。苦悩をひろげた者一人について、一人が代りに出かけて行って援助をもたらさなければならない」 (同上)

「あそこでは、いたるところで肉体的な悲惨がはなはだしい。ヨーロッパの新聞がそれについて書かないからといってわれわれには、それに目を閉ざし、それを無視する権利があるだろうか？われわれは甘やかされている。われわれのところでは誰かが病気になるれば、いつでも医者がある。手術の必要があれば、すぐに病院の門が開く。だがあそこでは数百万の人々が救助される望みもなく病苦に悩んでいるということがどういうことか想像してみるがいい。毎

日毎日数千人の人々が医術さえあれば除くことのできる怖るべき苦痛にさいなまれている。毎日毎日たくさんの実にたくさんの小屋の中で、われわれならば追払うことのできる絶望が支配している。誰でも自分の家庭生活の十年間を、もし医者なしで過さねばならなかったとしたら、われわれは眠りから覚めてわれわれの責任を認めるであろう。」 (同上)

追記 シュバイツァー病院で働いているあるスイス人の医学生の話によると、彼の医科大学では毎年数人の医学生をこのシュバイツァー病院に送ることになっているとのことで、彼は幸運にもその一人に選ばれて、やって来たとのことでした。



(スイスから来た医学生)

Dr. Andreas Steiner Interview

9 Dec. 1977

Q. この病院ではどんな患者が多いのですか。

A. まずマラリヤ、フィラリア、Schistosomiasis等の寄生虫病、それに淋病、これは非常に多くて成人の70%が淋病を患っていると言われてます。ヘルニアも多いですね。Myoma of Uteris, sickle cell disease, 潰瘍、レプラなども少なくありません。現在、癩病には48人の患者がいます。

Q. どの位の範囲の地方からこの病院に患者たちはやってくるのですか。

A. ほぼガボン全域からです。リブルビル(ガボンの首都)からも多いいです。

Q. リブルビルには政府が建てた近代的施設を備えた大きな病院があると聞いていますが。

A. その病院に入院して、それでも不安な患者がランパレネのこの病院へやってくるのです。

Q. 治療費、入院費はいくらですか。

A. 一日の入院費、治療費、薬代等全て含めて一人500 CF(≒2\$)です。しかし手術代は別で、その費用は手術の種類によって異なりますが平均して、10000 CF位です。

Q. 現地人たちにとっては、高すぎるのではありませんか。

A. ランバレネの向う岸からこの病院までボート（エンジン付カヌー）ではほんの10分足らずですが400 CF 取られるのです。そのことからすれば1日500 CF は安いと思いますよ。入院費や手術費の支払い能力のない患者はもちろん無料です。ただし、本当に支払い能力がないのか、どうかは調査しますが。

Q. 患者たちの食事はどうなっているのですか。

A. 食事は各自持参です。患者自身やその家族が病院内の炊事場で用意するのです。

Q. ここで働く白人従業員の労働時間はどれ程ですか。

A. 週40時間というのが一応の規定です。午前中は7時半から12時まで。午後は2時半から5時までですが救急患者のために夜中に手術をしたり、午前中の手術が長びいて正午過ぎまで手が離せなかったり、実際は規定よりもはるかに長時間労働していることになるでしょうね。

Q. そういう場合は、特別手当が付くわけですか。

A. いいえ、変りはありませんよ。

Q. 給与はどの位ですか。

A. 看護婦が月給400\$, 医者が600\$位です。

Q. 白人従業員と現地人従業員との間に差はあるんですか。

A. 白人は食事代と宿舎代は無料ですが現地人は食費は自己負担で宿舎代は無料です。現地人の場合と異なり白人の食事の材料はほとんど輸入品に頼らねばならず、自己負担では莫大な金になってしまうのです。他の面では、たとえば、現地人の看護婦が規定の資格を持った者であるなら、同じ資格を持った白人看護婦と給料は変わりません。給料に白人、黒人の差別はなく、学歴や資格によって差が出て来るのです。

Q. ガボン政府から、この病院に対する資金面の援助はあるのですか。

A. 毎年資金援助があります。昨年は確か5000万CFの援助があったはずですが。

Q. 他に資金援助は現在どういう国々から、またどういう団体から寄せられるのですか。

A. 額の多い順に、まずスイス次に西ドイツ、オランダ、アメリカ、スウェーデンなどです。フランスもですが額としてはわずかです。

Q. 日本は？

A. 聞きませんね。団体としてはスイスの'Association for aid of the Albert Schweitzer Hospital' 等です。西ドイツのベンツ社からは、この病院のた

めに一台の大型トラックが寄贈されました。

Q. シュバイツァー博士前後では病院はどのように変化したのですか。

A. シュバイツァー博士当時は治療から経理まで全て彼が責任を負わなければならなかったのですが現在は医療関係は私、経理の方面は他の責任者という具合に分担されるようになったことは目立った変化だと思います。また現在では、現地人に医学的な知識を教育し彼ら自身に責任を持たせる方向に動いています。

Q. シュバイツァー博士は病院の設備の近代化をあまりに好まなかったということですか。

A. 私は当時のことはよく知らないのです。しかし現在は医学の進歩に伴い近代的な施設も必要となり、この病院にも配備されました。設備の整った手術室、麻酔設備、レントゲン室や近代的な実験室など、スイスや西ドイツにおける地方病院並だと思います。

Q. シュバイツァー博士のランバレネにおける事業に対して売名行為だと非難する声もあるようですがそういう事に対してどうお考えですか。

A. 私はまだそういう声を聞いたことがありません。もしあなたの言われることが事実ならば言わなくてはなりませんね。

博士がこのランバレネと病院建設をするころ、まだフランス植民地だったガボンは貧しい地方でヨーロッパ人は現地人を搾取し、材木業で金もうけ(making money)に奔走していたのです。mission hospital もそれら白人を対象にしたもので、現地人のための病院としての役割を果たしたとは言い難いのです。ヨーロッパ人の現地人に対する罪、そのあがないとして「現地人を病苦から救う」という使命感を抱いてアフリカにおもむいたのは彼がはじめてでしょう。そういう意味で彼はパイオニアなのです。売名行為としてやれるほど生やさしいものではなかったのです。

Q. 現在の病院にシュバイツァー精神はどのように受けつがれているのですか。

A. アフリカの各地に、現在、現地人のための病院はあります。ただ残念なことに運営していくに十分な資金が不足しているのです。しかし、この病院はシュバイツァー博士が著名な哲学者であり音楽家であったこと、そして彼の事業が世界各国の人々に認められ、この病院が有名になったことにより、各国から援助が得られる。そのため、この病院で働くためにやって来る医師や他の従業員たちは、idealistic



(らい病患者)

purposeのために働くことができるという恵まれた環境にあるのです。現在のこの病院の真の目的は、医療だけにあるのではないのです。それでしたら、他にも、いくらも病院はあるでしょう。我々の今目ざしているのは 'true cooperation between Africans and White people' なのです。

ただ、博士が当時、現地人に対して真の 'friendship' を抱いていたのか、私には疑問なのです。彼は現地人たちを一段下の人間と見ていたのではないかと思うのです。

Q. シュバイツァー博士の言葉の中に「我々ヨーロッパ人と君たちアフリカ人は兄弟だ。ただ我々は君たちの兄である」という表現がありますね。

A. 言葉で「兄弟」というのはやさしいのです。ただ彼の態度が実際そうであったのか疑問なのです。

Q. シュバイツァー博士当時の現地人と、ガボン共和国という自国を持つ現在の現地人との相異を忘れてはいけないのではないのでしょうか。博士当時の「責任というものを知らずいつも暇な自然児」(博士は著作の中でそう表現しているのですが) に対して、当時よりはるかに教育された現在の現地人たちへの態度と同じ接し方、また、'true cooperation between Africans and White people' という発想が生まれてくるのか私には疑問なのです。あなたが博士当時にランバレネで働いておられたら、彼のような厳格な態度を取らざるを得なかったのではないかと思うのですが。

A. おそらく、そうですね (笑)

Q. あなた自身、この病院で働く決心をなされたのは、博士の影響ですか。

A. 私の場合、博士の影響というわけではないのです。海外で(彼はスイス人である)特に熱帯地方で働いてみたいと思っていたのです。それでそういう地方のいろいろな病院に当たってみたのですが、外科という私の専門部門に必要な設備が一番整っているのはこの病院だったのです。現在、この病院は私にとって非常に快適な職場です。

※ 病院の患者数、従業員等、Dr. Steinerのメッセージと重複するものは省略しました。ただし他にレントゲン技師、電気関係の技師、事務員など数人の白人従業員が働いていることを補足しておきます。

※ 患者の入院費(治療費も含む)は一等室が1日5000 CF、二等室1000 CF、三等室が500 CF

※ シュバイツァー博士の黒人に対する記述は「水と原始林のはざまで」(浅井真男訳)による。

「黒人は子供である。子供のところでは権威なしでは何ごとともできない。だから、わたしは黒人との交際形式をその中にわたしの自然の権威が現われるように作らなければならない。そのためにわたしは黒人に対して『わたしはお前の兄弟だ。だが兄だ』という言葉を作り出した。親しみを権威と結び合わせる。これが土人との正しい交際の大きな秘訣である」シュバイツァー博士の黒人に対する考え方について詳しくは「水と原始林のはざまで」の〈原始林の社会問題〉の章「白人と黒人の関係」を参照していただきたい。



(メガネをかけた人が Dr. Andreas Steiner 氏)

1978年度 予算

歳	入	歳	出
西欧諸国からの寄附金	117	白人従業員に要する経費(給与、食費、宿舍の維持費、交通費)	56
カン政府援助金	60	黒人従業員に要する経費(給与、宿舍の維持費)	56
患者からの治療費	10	病棟の維持費、新病棟の建築費	50
		医療費	20
		ライ病患者、性病患表らの食費	5
計	187	計	187

※単位 百万CF

(1\$ US ≙ 250 CF)

※ 病気名で日本語名の不明なものは、英語名で残しました。